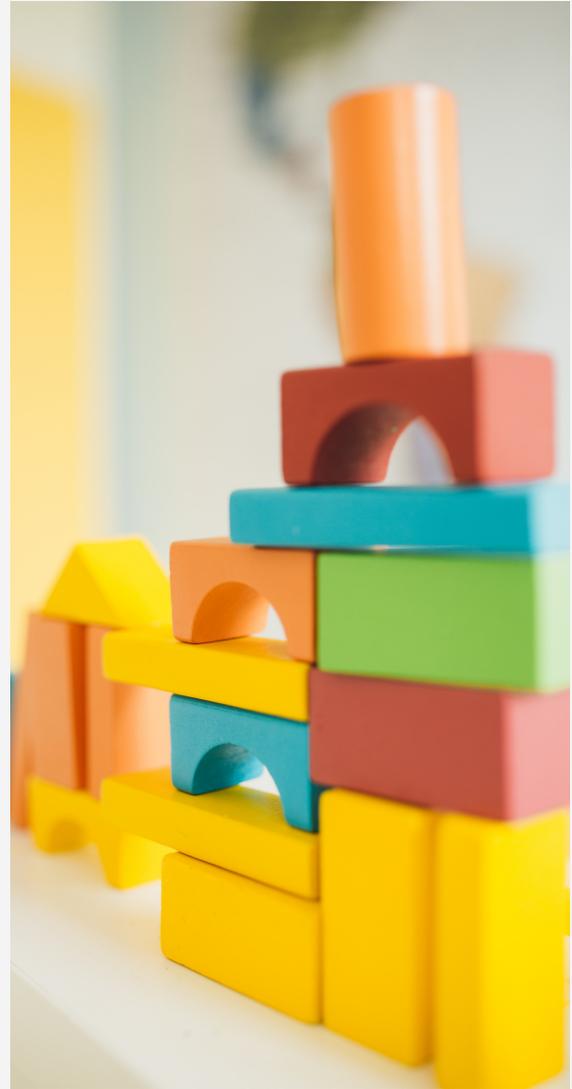


第二の家庭としての 環境構成

神田淡路町保育園大きなうち



子どもたちがいきいきと過ごす 大きなうち

両親が働く時間が増加傾向にある昨今、子どもが保育園で過ごす時間も必然的に長くなる。子どもが活動する時間の大半を費やすのが保育園であるため、保育園は『第二の家庭』とも表現される。そのため、本来の家庭同様に子どもが安心して過ごし、のびのびと成長できる場としての役割を担っていく必要があると考える。私達が行っている保育が第二の家庭として、子ども達の学びに向かう姿勢に繋げる中で、環境や保育者の関わりによりどのような影響が生まれているのか、乳児・幼児ともに職員間で共有していき、また現状での家庭への発信の仕方や繋がりについても振り返りや模索をしていきたいと思い実践に至った。

方法②

回答用紙		2才		回答用紙		4才児	
今興味を持っているもの (玩具・遊び)	環境設定	保育士の関わり方		今興味を持っているもの (玩具・遊び)	環境設定	保育士の関わり方	
① 現在の姿 例 洗濯ごっこ 洗濯機と洗濯機用洗剤 (洗濯) 洗濯機用洗剤	洗濯機と洗濯機用洗剤 洗濯機用洗剤	一緒に取り扱う やりかたを教える		① 現在の姿 例 洗濯ごっこ 洗濯機と洗濯機用洗剤 洗濯機用洗剤	洗濯機と洗濯機用洗剤 洗濯機用洗剤	一緒に取り扱う やりかたを教える	
② 第二の家庭として 遊びの場から分けて いかに気が付いた 環境を整える	遊びの場から分けて いかに気が付いた 環境を整える			② 第二の家庭として 遊びの場から分けて いかに気が付いた 環境を整える	遊びの場から分けて いかに気が付いた 環境を整える		
③ 一定期間後の 定期的な見直し	一定期間後の 定期的な見直し			③ 一定期間後の 定期的な見直し	一定期間後の 定期的な見直し		

◎環境改善

乳児:大人主体となる場面が多いため、意欲的に遊び行動出来るような環境を大人が作り、遊び方や方法を伝えながら機会を提供した。

0・1歳児:子ども達の遊びの傾向を推察し、個々が遊び込めるよう玩具の数の充実や間隔に配慮をした。

2歳:布団を敷く場面で取りやすい様に布団の置き場所や高さ等に工夫し、子どもの行動を想定した環境設定を行い、保育者が肯定する機会を多く設けた。

幼児:以前から取り組んでいた保育者からのきっかけ作りや子どもの様子に合わせた声掛け、適度な援助を行うことで子ども達の意欲を尊重することに加え、保護者の声に耳を傾けた。

人的.物的環境構成が子どもたちに与える効果

乳児:指先を使った遊びは手掴み食べや食具を持つこと等に繋がり、成功体験を通じて身の回りの事への興味や意欲が高まる様子が見られた(右上写真)。

2歳児の布団敷きでは関心に差があるものの、興味や挑戦してみたという思いが実現した。周囲に肯定してもらうことで達成感を味わい、子ども自ら発信や行動しようとする姿が捉えられた(右下写真)。



幼児：家庭と保育園との経験を通し、生活に必要な力を身に付け、相手を思いやる気持ちや身の回りの事象について見通しを持ち行おうとする等、第二の家庭として学びに向かう姿が捉えられた(右写真)。

この姿から保育者の関わりと大人が過度なアプローチをせず、子ども自ら行おうとする姿を活かしていく事が重要だと感じた。また保護者からも子どもの成長を感じたという声が上がリ、いずれも園生活で経験している事柄であった。



上記のように生きる力が育まれる為には、家庭に近い環境と関わり主体的な行動の促しが重要である事に気付いた。その上で家庭との協力体制を取っていく事の必要性を再確認した。

第二の家庭としての役割～これからの実践～

今回の実践を踏まえて、子どもが主体的に活動するためには、乳児期に受容される経験を重ねる事が大切だと結論付けた。十分に受容される事で自己肯定感が生まれ、その経験が失敗を恐れずに何事にも前向きに捉えられるようになり、幼児期に入った際には主体的な行動が出来るようになるのではないかと考える。その重要性は『乳児保育のねらい』(*1)に記され、『小学校以降の非認知能力の土台は幼児教育に基づいており、2歳からのつながりにも意識したい』とも述べられている。(*2)(*3)

また、家庭との連携をより深めるために、リモートやSNSを効果的に活用していくことを新様式における保育で実感した。ドキュメントやポートフォリオは様々な場面で有効視されており(*4)、保護者理解に関しても「保護者と保育者が共に向き合い共有する」ことの大切さが説かれている(*5)。情報発信は必要だが、家庭との繋がりを大切にするためには「双方向の発信」が重要である。そのために、以前受けた法人内研修で『傾聴』を大切にする事も教わっており、情報の流れが一方通行にならない様に工夫と改善を行っていくことが必要である。

これらを考慮して今回の実践で『方法』の項目で行なったアンケートは現在の保育を見直し、改善することに繋がったため、引き続き日々の保育や情報発信方法をより効果的なものに改善し、アンケートの様式をもとに「保育見直し改善シート」を作成し保育の向上を図っていこうと考えた。

参考文献:

*1著:厚生労働省 平成29年告示『保育所保育指針』編:木村美幸

発行:飯田聡彦 ㈱フレーベル

P10 11 12 14 17 18

・『乳児保育に関するねらい及び内容』と「受容的」「応答的」

・『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』と「主体的な言葉」

*2著:無藤隆 2016.1.18『これからの幼児教育』編:渡辺恵子

発行:山本倫明㈱ベネッセコーポレーション P18-21 「文科省の見解」

*3著:無藤隆 汐見稔幸 砂上史子 2017.5.15『3法令ガイドブック』発行:飯田聡彦 ㈱フレーベル
館

P95 「非認知能力と保育、乳児期との繋がり」

*4著:目白大学 荒巻美佐子2018.3『10の姿プラス5実践解説書』編著:武藤隆 発行:岡本功ひかりのくに

・ドキュメントやポートフォリオは様々な場面で有効性

*5著:聖徳大学塚本美知子2013.5.11『子ども理解と保育実践』編著:塚本美知子

発行:服部直人㈱萌文書林

P179-181 P176 P182

・「保護者と保育士が共に向き合っていく」ことの大切さ